

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

世界の能を目指す : 宇?通成と国際能楽研究会

著者	ペレッキア ディエゴ
出版者	野上記念法政大学能楽研究所共同利用・共同研究拠点「能楽の国際・学際的研究拠点」
雑誌名	能楽の現在と未来 (能楽研究叢書 ; 5)
巻	5
ページ	49-60
発行年	2015-11
URL	http://hdl.handle.net/10114/13219

世界の能を目指す—宇高通成と国際能楽研究会—

ディエゴ・ペレッキア

「明日からまた新しいのが来るんです。宇高といってやはり中学の一年の子ですが、観世の子方も三度程出たとかで、英語を勉強しながら習いたいという。一寸変わりだねになるかもしれません」（先代家元二世金剛巖）¹。

INI・国際能楽研究会の歴史はこのとき、昭和35年に遡る。初めにINIの創立者金剛流シテ方宇高通成師を紹介しよう。宇高家は四国、高知の河田家（日本画家河田小龍の家）と松山の宇高家、二つの家に由来する。宇高家は能楽師の家であり、幕末まで松山城に勤めていたが、明治維新の結果、能楽師としての活動が断たれてしまい、その後京都に移った宇高千代と河田蘭太郎の出会いから、宇高随生^{ずいせい}は能楽師ではなかったものの、謡曲を好み、素人として観世流の謡を習ったという。また22年に通成（本名朝雄）が生まれると彼に謡の稽古をつけ、観世流の子方として能舞台に出演させた。そして34年、通成が小学校を出た後、先代宗家・二世金剛巖のもとに弟子入りさせた。45年に22歳で内弟子を卒業した通成は、宗家の許可を得た上で「景雲会」を創立した。当時、能楽師でない家で生まれた通成にとってはゼロからの出発だったに違いない。²

先代宗家によると、通成は多少変わった弟子だったそうだ。確かに通成が

1 二世金剛巖（雑誌『金剛』50号。昭和35年9月）

2 宇高通成「ゼロからの出発」（『能楽タイムズ』第701号。平成22年8月1日）を参照。

能楽の世界に足を踏み入れてから周囲とは異なる性質を示していた点が少なくとも二つある。まず、中学校の頃より英語に深い興味をもったことが挙げられる。そのことについて「どうしてそこまで英語がお好みでしたか」と伺ったことがある。通成自身も理由は分からないそうだが、不思議なことに十数年後外国人と縁ができて、英語で能の指導をすることになった。国際化が進んだ現在においても英語で指導ができる能楽師は少なからう。

そしてもう一つ特徴的だったのは、小学校の頃より美術を好んだ通成は能面に関心を引かれ、能面作りを独習して、その成果として現在までに多くの能面を作り出したことだ。通成の作品は、観賞用のみならず、実際に舞台でも使われている。金剛家も通成が打った能面を四面ほど所有しているらしい。さらに、53年に「面乃会」を創立し今まで多くの弟子に指導してきた通成は、シテ方でありながら能面師の活動を行う唯一の能楽師であると言えよう。

国際能楽研究会の歴史

昭和50年代はまだ40年代に始まった能楽ブームが続いており、趣味として能を選ぶ素人の人口が多く、景雲会も創立されるやいなや弟子が詰めかけたという。サラリーマンのクラブ、文化センターでの教室など、活動を盛んに行っていたが、能楽の未来における通成のヴィジョンは従来の社中に限らず、能の美と精神を国際的に普及することだったため、外国の弟子も集めようと考えたそう。当時においては珍しいであろうが、通成は教室の宣伝の英語版も作り、やがて能楽に関心があった関西在住の多くの外国人が、通成の稽古場に通うことになった。

しかしそれは驚くべきことではないだろう。その当時には新しい世代の外国人能楽研究者の登場が見られる。例えば現在著名な日本伝統芸能研究者になったリチャード・エマート、モニカ・ベータ、トム・ヘヤー、ローレンス・コミンズ、ジュリー・イエッツィーなどがその頃の日本に滞在していた。その新世代の研究者には従来の研究者と比較すると大きな違いがみられる。この50年代に登場した学者は能・狂言を研究するためには舞台の実践を体

験することが不可欠だと思い、自ら稽古に挑戦していた。その中の一人、家族と一緒に京都に引っ越していたリベッカ・ティール（日本古典文学研究者ロイ・ティールの娘）が英語による宣伝のおかげで通成特有な謡・仕舞と能面の徹底的な指導に魅せられ、47年に景雲会に入門。通成の育成の甲斐あって55年金剛流師範の免許を取得し、平成8年小鴨梨辺華という名を取り、能楽協会京都支部の会員になった。史上初の外国人の能楽協会会員の誕生である。

その当時大蔵流の茂山千之丞の元で学んでいた狂言専門家ジョナ・サルズ（現龍谷大学国際文化研究科教授）はティールと縁ができて外国人向けの伝統芸能プログラムを実施する手筈を整えていた。そこで昭和59年通成とティールはサルズと力を合わせて Traditional Theatre Training (T.T.T.) を創立した。T.T.T.は集中的な伝統芸能プログラムであり、参加者が能楽、狂言（現在は小鼓と日本舞踊も）のコースを選ぶことができ、三週間ほど稽古を受け、最終的な到達目標として発表会に出るというものである。

ところが61年に様々な事情があり通成・ティールはTTTを離れた。TTTはそのまま存続しているけれど、通成はティールと共に能の稽古を続けたい弟子のために別のグループを作ろうと決めて International Noh Institute (INI)、いわゆる国際能楽研究会を立ち上げた。これより通成が多くの外国人の弟子を育成し、ティールの他、アメリカのジョン・マカティア、そしてフランスのモニーク・アルノーが能を熱心に学んだ結果、師範の免状を取得するに至った。

それを受けて63年の『金剛だより』という金剛流の定期刊行物で通成が下記の通りINIを紹介している。

「インスティテュート」は、研究所や協会あるいは講習会といった意味で、INIは国際能楽研究会という意味になるでしょう。能楽の素晴らしさは、あらゆる国籍や習慣を超えて人々の心を引き起こす力を持っていると言えます。能楽や能面、また狂言という独特の表現形式とその精神

を共有する様々な国の人々が、日本および海外に置いても学び、上演することは、真実の国際文化交流の実践の場として将来、貴重な存在となるとともに、多くの人々に安らぎをもたらすのではないのでしょうか。³

このように通成は国際能楽研究会に対しての高い希望を持っていた。当時より長年にわたる国際能楽研究会の活動については一言で説明するのは難しいが、以下にまとめてみよう。

国際能楽研究会ミラノ支部

フランス人女性モニーク・アルノー（現ベネチア IUAV 大学准教授）は、大阪に滞在しつつ 10 年間ほど通成の稽古場に通い続けていたが、師範披露をした直後の平成 6 年イタリアのミラノに引越すことになった。日本から遠くに移ったものの、能を諦めずにイタリアにも能を普及するため国際能楽研究会の支部を立ち上げ、講座、ワークショップ、デモンストレーションなどの活動を盛んにおこなったという。海外を拠点にする唯一の能楽師範アルノーは、一時だけワークショップに参加した人が能を学び続けられるように自宅に稽古場を作った。そこに集まる弟子はすでに日本の伝統文化に興味を持っている人だけではなく、演劇、ダンス、パフォーミング・アーツの実演者も少なくない。

私は平成 18 年 INI ミラノ支部のデモンストレーションを見た後、修士卒業論文（黒澤明の『蜘蛛巣城』について）の研究取材のためアルノーの自宅を訪ねた。ところがインタビューがまだ始まってもなく突然「やってみたら」と言われて、いつの間にか謡の稽古に巻き込まれることになった。その当時日本の文化が全く分からなかった私には驚きだったが、振り返ってみるとそれこそが日本の伝統文化なのではなかろうか。つまり、知的に考えず、素直に体で受け取るというのが日本芸道、すなわち日本独特の体系的な活動の根底にあるということに気付かされた。

3 宇高通成（『金剛だより』昭和 63 年 7 月 1 日）

稽古を始めた時にはまだ経験しておらず意識していなかったが、ミラノ支部の学習環境は京都本部とほとんど同じ形となっている。主な違いは、内容ではなく、言語であろう。ミラノ支部ではアルノー以外は弟子が皆日本語に堪能ではないから、イタリア語で指導するのが当然である。しかしそれは稽古の進行に何ら悪影響を与えず、むしろ伝統芸能の国際化にとっては注目すべきエピソードを生んだ。

日本伝統の世界では「お稽古」といえば、まずは挨拶。稽古が始まる前にお辞儀して、「よろしくお願いします」と、師匠と弟子が挨拶を交わすしきりになっている。そして稽古が終了した時に同じくお辞儀して「ありがとうございました」と言うことが通例である。この挨拶は日本の事に詳しくないイタリアの一般人でも映画で何度も見たことがあるであろう。恐らく彼らは武道を連想し、日本には厳しい礼儀作法があるという固定観念を持つかもしれない。しかしアルノーは上っ面の固い挨拶作法ではなく、格好より内容を大切にしようと、挨拶の言葉をイタリア語に変えた。その結果頭を下げて「grazie」という言葉になった。挨拶は即ち稽古、いわば伝承の空間を区切り、教える側も受ける側もお互いに尊敬を表す所作であろう。こういった重要なものを母国語で聞くと尊敬と感謝の気持ちが通じるに違いないとアルノーは考えたそうだ。その行為を見た私には、国際能楽研究会がただの日本文化マニアの団体ではなく、能のエッセンスを目指している会なのだということが分かった。

私は INI ミラノ支部のおかげで能の道に足を踏み出すことができたが、通成のもとで学ぶために平成 18 年イタリアから離れて、ロンドンで博士課程の勉強をすることに決めた。そこで日本語も学んで毎年 2〜3 ヶ月日本に来ており、稽古も発表もすることができた。そして博士課程を修了した後に来日し、現在まで INI の京都本部に勤めることになった。

INI・国際能楽研究会の主な特徴

これより INI・国際能楽研究会の主な特徴を述べてみよう。一言で言えば、

INIは通成の社中「景雲会」に属している外国人弟子ということで、メンバーは創造的な芸術活動をしたくて加入するのではなく、伝統的な能の稽古を目指している。従ってINIは他の素人会と変わらず、皆一貫して通成の元で習っている。例えば私は平成17年～19年イタリアに住んでいた時にはアルノーに習い、それ以降は24年に日本に在住することになるまで短期でも長期でも毎年日本に来て通成に師事した。囃子の勉強を別にして、シテ方の教育はINIの傘下に限られている。

創立時より現在に至るまで、通成が育てたINIの弟子は大体三つの種類に分けることができるであろう。一つ目は日本に住みながら長期で習っている者。現在はリベッカ・ティール、イレーイン・チェックと私（ディエゴ・ペレッキア）のみである。このメンバーの主な活動は稽古の他に国内で謡・仕舞と能面ワークショップを行い、海外公演、外国語出版などの運営をするということである。二つ目は海外に住みながら長期で習っている者。現在はモニク・アルノー、クリスティーナ・ピチェッリ（ミラノ支部）、永井アンジェラ（ブラジル支部）、リー・ストザーズ（カナダ支部）のみである。これらのメンバーは海外に在住しながら稽古、ワークショップ、講座などを立ち上げてきた。アルノーは先述の活動をしており、永井はブラジルのサンパウロで催される諸流イベント「移民能」に参加している。ストザーズはカナダのバンクーバーの自宅へ敷舞台を設置し通成を招くことができるようになったため、謡・仕舞と能面の集中稽古を行っている。それに加えて、各支部に属している者は日本で行われる集中稽古、研究会・大会などに参加するため定期的に来日する。このうちミラノ支部のアルノーは師範の免状を取り、本格的な指導ができるので、ピチェッリは長年ミラノで学び続けてきた。最後に三つ目は短期でINIに参加する留学生、あるいは1年以下日本に滞在して帰国する者。しかし国に帰った後に一人で稽古を続けることが難しく、帰国後に辞める者が多く見られる。これは反省するべき点だと思う。

INI の主な活動

景雲会の一部としての国際能楽研究会は勉強会、発表会などの際、日本人と外国人の区別無く舞台に登場する。本拠地は京都だが、松山、岡崎、名古屋、横浜、東京の景雲会稽古場も使用されている。景雲会は元々素人会だが、熱心に学んで師範免状を取った上で能楽協会会員になった者が20人ほどいる。通成は弟子になるべく高いレベルまで到達するよう徹底的な教育を受けさせる。京都本部の稽古場では月に3回謡・仕舞の稽古があり、長期で滞在する者に対応するため集中コース（週に2・3回）を実施している。

景雲会の弟子は基本的に謡と仕舞を学び、さらに能面制作を学ぶ者が数人いる（INIでは小鴨とチェック）。日本に滞在する者は、囃子は囃子の先生に直接習っているけれども、海外から通う者は謡を上達するために太鼓と小鼓の基本の手を通成に習う。景雲会の定期イベントとして囃子研究会が年に1、2回行われ、そこでは弟子が交代しながら太鼓、小鼓、謡、舞を務める。



能『巻絹』 シテ：モニーク・アルノ、ツレ：高谷大悟（ディエゴ・ベレッキア改め）

金剛能楽堂 平成22年6月12日

そして毎年11月松山市民能の前座として謡・仕舞の発表会が行われる。さらに2年ごとに金剛能楽堂で大会が催され、謡・仕舞に加えて囃子方を招いて能2、3番が上演される。これほど多くのイベントに参加するINIの者は、連吟・素謡、仕舞、舞囃子ばかりでなく、能のシテも務める機会がある。現在までのところシテを務めたメンバーは下記の通りとなる。小嶋梨辺華『羽衣』、『半蔀』、『巴』、『葛城』、『巻絹』、『葵上』、『野宮』、『雪』。アルノー『半蔀』、『羽衣』、『巴』、『葵上』、『巻絹』。ペレッキア（芸名 高谷大悟）『清経』。

能楽師育成以外にINIは普及活動にも力を入れている。京都在住の市民向けにワークショップ、能面展覧会などを行い、金剛定期能では英語版パンフレットを作成し、外国人の客の鑑賞サポートをしている。そして通成の国際活動を支える事務局として海外公演、外国語出版物などに関する対応をしている。

国際化と伝統技術の習得

さて能を学ぶというのはどういった知識を取得することであるのか。そして知識、技術以外に教師と学習者の間に何が伝えられるのか。芸の技を自分の身につけることを最終的な目標にしても、言うまでもなく能は総合芸術から、実践者が一人で習う、一人で演じることはできないはずであろう。能楽教育を理解するためにはその学習が行われる状況を考える必要がある。能の稽古は基本的にマンツーマンという形だが、稽古場に集まった弟子が自分の出番を待ちながら先輩の稽古を見学したり、後輩を手伝ったりするという習慣がある。最近忙しい弟子の希望に応じて、決まった時間で予約式の稽古をする能楽師もいるそうだが、多くの能楽師は昔ながらの習慣を貫いている。

こういった社会的学習形態は人類学者のジーン・レイヴとエティエンヌ・ウェンガーによると「状況に埋め込まれた学習」と呼ばれている。⁴レイヴ

4 ジーン・レイヴとエティエンヌ・ウェンガー『状況に埋め込まれた学習—正統的周辺参加』（産業図書1993年）

とウェンガーの理論によればこれは学習者が参加している状況で知識を取得し、またそれを同じ状況に当てはめることを指す。とりわけ芸道の世界では師匠の「真似」に基づいている伝統的教育体系が根強く、学習が行われる場は個人の中でなく、師匠と弟子の間にあるものだ。能の師弟制度では弟子が体で覚えた知識を私用するのではなく、師匠の芸を踏襲して自らも伝統の一部を構成する。INI の思想では芸術作品としての能はその作品を生み出した環境と隔てられない。

現在の能楽世界は他の芸術と違い、プロとアマチュアは特別な共生関係で存在している。経済的側面では明治維新以来封建制度が消滅して、能楽師は素人に能を教えることに活路を求めた。その結果パトロンとなった素人と玄人の間には強い相互依存関係がつくられてきた。玄人のこの重要な収入源を守るため、素人は同時に複数の先生に習ったり、師匠の許可を得ずに舞台に出たりするのが禁止されているので、社会的側面では弟子は師匠に従属しているということが否定できないであろう。つまり素人は玄人と共生している能楽世界の仕来り通りにすれば出世できるといえよう。それ故稽古場の掃除、お茶の準備など、師匠への尊敬と誠実さを表す行為、いわゆる「日本らしい礼儀正しさ」は芸の取得過程に直接影響しないとはいえ、能楽世界で高く評価される。

実際、INI のウェブサイトに掲載している説明文の中で通成は次の通り述べている「(INI による) レッスンには能の基礎となる伝統的価値観、その中でも師弟関係及び弟子同士の関係を表現する言葉と行為を重視する。」面白いことにこの言葉はサイトの英語版のみにある。日本人にとってそれは当然であるためか、このメッセージを特に外国人に語りかけていると思われる。先に述べたように外国の弟子が障害にぶつかる可能性があるのは能において「知」とその「知」を具現化する人間が分離できない点に一因があるのではなかろうか。例えを一つ取り上げてみよう。数年前、私はしばらくイタリアに帰ることになり、練習用の太鼓を持っていくように言われて、道具と一緒に取り扱い方の合意書にサインした。この合意書には「一、練習する前にお

調べを打つこと」「一、練習する前に先生がいる時のように、お辞儀すること」と書かれていた。練習結果に影響を及ぼさないのに、なぜ師匠がいない時にもお辞儀する必要があるのかと読むやいなや愚痴をこぼしたもののだが、思い返してみるとこのお辞儀は師匠と弟子との「結び」の象徴であったようだ。道具は借りたものであるだけでなく、私に伝えてくれた伝統の一部ということだったと思えてならない。つまり能は「作品」としてだけ扱うのではなく、実践共同体と呼ばれる学習者のコミュニティーとなる能楽世界の社会的側面も考えることが不可欠である。INI ではメンバーが前述の師弟及び弟子同士の関係を貴ぶ態度、換言すれば能楽社会の伝統的制度を認めることが必要だと考えられているのだ。

しかしこれは能の世界に初めて足を踏み入れる人には納得しがたい点であろう。能に触れるだけで十分だと思う人、そして短期で取得した「知」を自分のものとして自由に使用したいという希望を持っている人にはどのように答えればよいのか。即ち能の世界に関わらず、「芸」だけを「盗む」ことは倫理的に正しいかどうかということについては賛否両論がある。



国際能楽研究会ワークショップ Impact HUB Kyoto 平成 27 年 5 月 7 日

実のところ、保守的な態度をとっている INI は他の国際的・日本伝統芸能トレーニング・プログラムに比べると参加者の人数は少ないという事実がある。確かに伝統の枠を超えて能を国際・学際的に広めようと思いながら伝統的伝承状況を守ることは困難である。恐らく戦後以降、世界中の芸術の国際化（或いはグローバル化）が始まった時点で短期ワークショップ、集中講座などの学習環境は日本でも立ち上げられたが、「短期」は生涯学習と呼ばれる「芸道」の基本理念と矛盾しているように見える。しかし日本人でない人たちが日本の仕来りに盲目的に従うとは期待するべきではない。これからは、国際化を充実させるために文化交流を認めなければならないだろう。通成が述べたように、能が「真実の国際文化交流の実践の場」になるということは無視できないはずだ。

国際能楽研究会・これからの挑戦

では国際化している現代と伝統的学習状況はどのような折り合いをつけられれば良いのか。現在、能の世界は苦境に立たされている。バブル経済がはじけ、平成 20 年以降リーマン・ショックが起こした経済危機が祟って、観客にせよ、素人弟子にせよ、能愛好者の人口の減少が見られる。⁵ あいにく、この危機の悪影響は INI にも及んでいる。私は平成 18 年以來 INI に属しているので、会の全盛期となった昭和 60 年代を自ら経験していないのだが、その当時の盛んな活動を取り戻すため、諸先生・諸先輩方、後輩とともに現在における INI 能の価値観と役割を改めて考えている。INI は伝統を守りながら外国の人々に本格的な稽古をつけることを目標、あるいはミッションとしていられるけれど、世界の移り変わりを認識した上で、国際的指導へのアプローチ改善をする時が来たと思われる。

近年、デジタル技術の進歩のおかげで国際的なネットワークを作成することはより容易になった。SNS を利用して公演案内などを知らせている能楽

5 堀上謙「再考・謡曲人口の減少」(『能の集積回路』2013 年 64~67 頁)

師が少なくない。そのような中 INI もブログ、フェースブック、ツイッターなどを利用しながら会の思想と活動を遠方まで届けるようになっている。その結果多くの国から相談依頼や稽古の申し込みなどがしばしば来ている。しかし京都でその依頼に応える計画にはまだ改善の余地がある。日本でしか受けられない徹底的な能楽教育（謡・仕舞・囃子の稽古、公演鑑賞）をさせること、そしてその教育を取り囲む環境（価値体系、しきたり、師弟関係）を浴びて学ぶことが重要であるから、外国人の来日を容易にするために、通成は、外国の弟子に宿泊、食事、練習などをさせることができる「能楽アカデミー」のような場所を建てることを考えている。

また、海外においては単発ワークショップばかりを行うより、定期トレーニング・プログラムを行えば首尾一貫した指導を受けさせられるようになるであろう。プロの能楽師は日本で仕事に追われ、海外で長い間活動するのが難しいことだろう。だからこそ、外国人師範の次世代を育成することによって、国際伝承の未来へ新たな扉が開かれるのではないだろうか。これから新しい挑戦が始まるが、我々 INI 国際能楽研究会は平成 28 年 30 周年記念の準備をしながら能の研究、発表、国際的普及など、世界へ向けての発展に努力して行きたい。